
私はこの世界が大嫌いだ

ウ` アイス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私はこの世界が大嫌いだ

【Nコード】

N9504S

【作者名】

ウァイス

【あらすじ】

五つの大陸と七つの国。魔法と剣が反映する世界エルディバ。

国の規模や軍事国家として有名な帝国。神を信仰する宗教国家、聖リブル国。

二つの国が戦争を初めて十年は経った。戦いは帝国の圧勝で終わると思われたこの戦争。だがリブルはしつこく耐え忍び、そして……
…リブルは戦争に勝つため、異世界より勇者を呼ぶことに成功した。

ひっくり返る戦況。勇者の力は強大で、たちまち帝国は戦況を逆転
されてしまった。

そんな中。一人の少女と、一人の女性が帝国に訪れた。

プロローグ

ぽたぽたと雨が大地に降り注ぐ。

空を覆う雨雲達はまるで変わりに泣いてくれているかのように大地に雫を降り注いだ。

燃える草木、半壊したシンプルに木で造られた家々。

炎は堪えず轟々と燃え盛り、雨が降ろうと衰える気配を見せない。

「……あ」

ざあーっと降り注ぐ雨の雫が一人ポツンと佇む少女の顔に落ちた。

そのまま涙が流れるように雨の雫は少女の顔から流れ、少女は思った。

泣けない自分の変わりに空が泣いてくれるのだろうか、と。

あながちそれは間違いではないのかもしれない。数時間前までは活気に溢れていた一つの村。

森に囲まれ、王都や町からは随分と離れ、収入も少なく、商人も来ることが逆に珍しいこの村。

生活は毎日が苦しかったが少女はこの村を嫌いではなかった。毎日父と母と笑い合い、村の人達に親切にされていた。

少女と同年代の子供がいなかったことも含まれて少女は大切にされていた。

それが今はどうだ。誰も彼もが死んだ。両親も、村の村長も、少女に昔話として面白い話を聞かせてくれたお爺さんも。

誰も彼もが炎に焼かれ、ギラギラと光る鉄の刃に切り裂かれ死んでいった。

たった一人。少女はたった一人生き残った。いや、生き残って“しまった”。

本音を言えば少女も村の皆や両親と共に死にたかった。

一人残されて生きるほど少女に活力はなかった。

ざあーっと雨が大地に降り注ぐ。炎は勢いを衰えさせ、ゆらゆらと存在を証明させるかのように揺らぎながら燃えている。

炎が衰えたことで、今まで見えなかったものが見えてきた。

それは焼けた死体。無数の焼けた死体。

どこも見渡せば見えてしまった。

なんで私は生きてるのだろっ。そう少女は思った。

ザッザッと足音が聞こえ、少女は振り返る。

「……………誰？」

誰でもいい。少女は早く殺して欲しかった。早く両親や村の人達の下へ行きたかった。

もしこの足音が少女の村を襲った奴らなのだとしたら好都合過ぎて、笑みが出てしまうほどに少女は思っていた。

だがその思いは裏切られる。

少女が振り向いたそこには長い血のような真っ赤な髪を揺らしながら少女に近づく女性が一人。

暗くてよく見えないが、少女の目でもその真っ赤な髪は確認でき、尚且つ女性であることも理解した。

求めていたものとは違った。

少女は落胆しながら女性を見ていた。

「雨が降ってる」

不意に女性から発せられる声。

女性特有の高い高音の聲が大地に響き、女性は空を見上げながら言う。

「きつと空があなたの変わりに泣いてくれている」

泣かない少女の変わりに空が泣いてくれている。それは少女自身も

思ったこと。改めてそう言われると本当にそうなのかもしれないと少女は思ってしまった。

いつの間にか女性は少女の真横にいた。

真つ赤な髪を靡かせ、女性は少女の頭に手の平を乗せる。

「なんで泣かないの？」

「泣けないの」

悲しいはずなのに泣けない。苦しいはずなのに泣けない。でも、だからこそ空が少女の変わりに泣いてくれている。

「そう」

ただ一言。女性はそう言うときしゃっと少女の頭を撫でた。

少女はなにも反応せず、ただその身体に雨の雫を流れさせる。

「一緒に来る？」

頭ごなしに女性の手から伝わる人間特有の体温。それが少女を温めたのだろうか。先ほどよりかは不思議と死亡願望は消え、なぜか女性の言葉に頷いてしまった。

「そう。じゃああなたの名前は？」

少女は顔を上げ、真横にいる女性を見上げる。女性は少女に向けて微笑んでおり、だが少女は無表情。

「……アリカ」

「行こうアリカ」

少女の頭から手が離され、変わりに少女の目の前に女性の手が突き出される。

少女はその手を握った。

帝国

ガヤガヤと町民の声や商人の声で賑わう広場。

物を売りに来た商人がシートを広げ露店を出し、出された商品を物珍しそうに町民達は見て回る。

「露店市か……掘り出し物でもあるかな。アリカはどう思う？」

そんな広場に真っ黒なフードとマントで顔を隠したなんとも場違いな格好をする二人がいた。

「さあ？でも、なにか面白い物でも見つかるといいね母様」

一人は170ぐらいあり、声からして女性と思われる。

もう一人は140ぐらいの子供のような背丈で、これまた声からして女性と思われる。

二人は町民に混ざり市場を回るが、しばらくすると長身の女性がつかりと肩を落としながら市場を出た。

「……元気出して母様」

落ち込む女性を慰めるようにもう一人が声をかける。

「まあいいわよ……最初から期待はしてなかったし」

長身の女性はそんなことを言いながら、肩を戻す。

そして気づいたように女性はもう一人に振り返った。

「暇も潰したし、そろそろ行く?」

「予定の時間には随分と遅れてるけどね母様」

「うつ……。ま、まあ仕方ないじゃん!それに少し遅れたぐらいでメルスは怒ったりしないよ」

「母様がいつも予定通りの時間に来ないから諦めてるだけだと思っ
よ」

うつとまた肩を落としながら女性は落ち込む。

そんな女性に呆れてるのかももう一人はため息を吐きながら、町の中を歩いていった。

—

ここ帝国はメルス大陸という、世界に五つある大陸の中で一二を誇る広さがある場所に開拓され、国としても一二を誇るぐらいの強力な軍事国家である。

大陸全てとまでは言わないがメルス大陸の半分ほどを領土とし、国の広さもまちまち。

だがそんな帝国であるが、今は危機に陥っていた。

人の手に負えない魔物が攻めてきたわけでもなく、弱小国である聖リビア国との戦争であった。

この世界でたった一つの宗教国家。この世界、エルディバを創ったとされる女神……アリビア神を信仰する国家である。

だが弱小国である聖リビアに帝国が危機に陥ることなどありえないこと。

軍事力も、国としての大きさも、民の数も、どれをとっても帝国が聖リビアに負ける要素などない。

だがそれもたった一人の人間によって覆された。一時、聖リビア国の首都まで追い詰めた帝国。

あと少しで城も征圧というところで、城内に光が舞い降りた。

勇者召喚。異世界の力ある人間をこの世界に召喚するという、遥か昔禁忌とされた召喚魔法。

禁忌とされた理由は二つ。まず呼んだ人間を元の世界に戻すことができないから。そしてこれがもっとも重要。

呼んだ人間が善人とは限らない。

悪人を呼ぶ場合だってあるのだ。過去に悪人を呼び出して、滅んだ国もあった。

勇者召喚で呼び出す人間は誰も彼もが力を持っている。それもたった一人で国を滅ぼせるほどの力を持った人間だ。

もし悪意を持った人間でも召喚した場合。さらにはもう帰れないと知った場合。

腹いせに暴れられでもしたらまた一国が落ちかねないからだ。

だが奇跡が起きたのだろう。聖リビア国に召喚された勇者は……誰もがお人よしと言うほどの善人だった。

召喚されて1時間足らずに勇者としての力を発揮し、帝国の兵を押し退け、聖リビアの危機を脱した。

そして帝国と、聖リビアの立場が逆転した。

二

「……まだ来ぬのか？」

「国王。……一体誰を招いたのですか？予定された時間すら守らない人間など、信用できるのでしょうか？」

「ぬう……。ギリアの言うことはもっともじゃが、いつものことじやしのう」

帝国王都にある帝国城、最上階にある王座。そこに座る銀髪をオールバックにした青年と、その横に佇む金髪の少年。王座に座る青年の名前はナイト・メルス・ブラウゼル。ここ帝国の国王であり、今年で32歳のまだ若手の王である。

そしてその横に佇む少年は19歳という異例の若さで王の側近に選ばれたという。

首につくつかないかぐらいの金髪サラサラヘアーの少年。

顔は二枚目。世間的にイケメンと言われる人種である。名をギリア・ノーガス。

そんな彼らが今か今かと待つのはどこの誰か。

王であるナイトの指定時間を見捨てても、罪にはなりえないというこの国からしては非常にありえない人物。

普通はどんなことであれ、王との約束事を破れば不敬罪として良ければ罰金。悪ければ死刑になる。

だが、今二人が待つ人物はそれには当て嵌まらない。そんなことをしようにはすぐさま帝国が滅びを迎えるであろうとナイトは理解していたからである。

だがギリアは待ち人のことを詳しく知っているわけではない。

ただ王の古い友人が来るとだけを知らされて、念のための護衛として居るだけなのだ。

だからこそギリアは王の言葉に不満を持った。王を蔑ろにする者は例え、神であろうがギリアは許さない。

指定した時間すら守れない者はもつともだ。何かしら理由があるのなら、ギリアも怒りはしないが、王に聞けばいつものことだとまで言われた。

それはギリアとして許せることではない。一度ではなく、何度も同じことがあったのならもう救済の余地すらギリアは与えない。

待ち人が来たならばすぐさまギリアはその者に制裁を与えるべく、腰に引っ掛けてある長身の剣……ロングソードをすぐにでも抜けるよう手をかけていた。

三

「母様」

「なーにアリカ？」

黒フードとマントで顔を隠す二人は帝国の城下街から帝国城まで足を運んでいた。

もう城は目と鼻の先というところで背丈が小さいほうの少女……もう一人からアリカと呼ばれた少女がもう一人に声をかけた。

「正面から入るのですか？」

「そうだけど？」

アリカの言葉に首を傾げながら答える。

アリカとしてはこの“恰好”で城に入れるのであれば、この国はいろいろと終わっていると言いたくなってしまふ。

顔を隠し、尚且つマントで身体まで隠した二人組。怪し過ぎて、笑いたくなるほどの見た目でだ。

それを通す門番などいないだろう。どんな人間だろうが、さすがに怪し過ぎて入れはしないだろう。

だがアリカの言葉の意味に気付かない彼女にアリカは小さくため息。横でため息を吐くアリカを心配そうに見る彼女を無視し、アリカは歩くスピードを上げた。

「待つてよーアリカー」

そんな彼女の声が城下街に響いた。

四

「報告します」

白銀の鎧を着込んだ一人の兵がナイトが座る王座の前に膝を付いて声を上げる。

「なんじゃ？ 話せ」

そのナイトの声を鍵に兵は新たに紡ぐ。

「只今門前にて王の友人と名乗る二人組が来ておりますが……見た目が見た目でして、さらには王と関わりがあるという証明できるものもなく、王に判断を伺いに来ました」

ナイトは知らず知らずにため息を吐いた。こうなることは予想できていた。

彼女はそういう人種だからである。以前来た時に渡したナイトの名前入りの署名状もすでに持っていないことも安易に想像できた。

彼女が来るたび来るたび、渡してはいるが、彼女がここに訪れた時

に持ち合わせていたという記憶はない。

「見た目は？」

「黒いフードとマントで顔を隠した二人組です」

確定した。ナイトの頭の中では確実にだ。

しかし、聞き慣れない言葉がナイトには聞こえた。

「ふむ……二人組とな？」

「ハッ！そうです」

ナイトの問いに答えるように兵は声を張り上げ、答えた。それはおかしいとナイトは思った。彼女は常に一人だった。誰一人と彼女に同行する者はいない。いや“できない”。

もしかしたら違う人物なのかもしれない。彼女と同行できる人間などいるわけないのだから。

「追い返……」

ナイトが喋ろうと声を紡ぐと同時にズンと低い重音が鳴り響き、城が揺れた。

城の最上階にあるこの部屋にまで伝わるほどの揺れと衝撃。

すぐさま城の外から鐘の音が鳴り響き、侵入者が現れたことを城内へと伝えた。

「侵入者のようですね王」

「ふむ、そうじゃの」

侵入者の特定はするまでもないだろう。ナイトの目の前にいる兵が言っていた怪しい二人組。

それ以外考えようがない。

「ギリアはここで待機じゃ。お主は侵入者を捕らえに行くといい」

もしものためにギリアを手元に置き、ナイトは目の前の兵に目配りしながら言う。

「ハッ！」

ガチャガチャと鎧から音を鳴らしながら兵は立ち上がり、部屋を出ていこうとする。だが彼がドアに手をかけたところでドアが吹っ飛んだ。

彼を巻き込みながら。

そこから現れるのは黒いフードとマントで顔と身体を隠した二人組。140ぐらいの背丈の小さい者とそしてドアを蹴り飛ばしたのだろうか。

片足を突き出しながら止まっている者が一人。

ナイトが思った通り、侵入者達は兵が言っていた二人だった。

ギリアが腰にかけた長剣を抜くのと同時に小さいほう動いた。

ナイトとギリアにも目に留まらぬ速さでその場を駆け、ギリアが気付いた時には時遅く。

「っ!？」

ギリアは前のめりに床に倒されていた。背中には小さいほうが一人乗っかりながら。

そしてもう一人がゆるりとゆっくりな動作で足を戻す。

「お逃げください王！」

ギリアが叫ぶがナイトはただ単に冷や汗を流すのみ。ナイトはわかってしまった。理解してしまった。

目の前にいる者が誰か。だからこそナイトはどうしてこの場をおさめるか考えに考え込んでいた。

そして。

「メーリースちゃん？」

死の宣告がナイトに告げられた。

五

「どういうことかなー？なんで私やアリカが不敬罪なんかに関われないといけないのかしらー？」

説明してと言わんばかりの言葉でナイトを攻める黒フードの彼女。

アリカは我関せずと言わんばかりにギリアの上にのしかかりながらその場を眺めてるい。

「ま、まあ落ち着くのじゃアインハルト」

「いいからさっさと説明しろっつってんだろボケえ！」

ズガンと粉碎音。ただ足踏みしただけで彼女の足元に小さなクレーターが出来上がった。

言葉使いも少し乱暴に変わり、見ただけで彼女が苛立っていることが理解できた。

「いいかメルス。私は誰だ？」

「う、うむ。我が友人アインハルト・ツバルギア・ストラウスじゃろっ？」

「だったらすぐに城へ入れろやこのボケナス！」

「貴様ああああッ！！！！？」

今まで倒れ伏せていたギリアの身体が起き上がる。上にのしかかるアリカを押し退け、ギリアは手に持った長剣を構えながらアインハルトへと駆けた。

王への暴言。それは許せることではない。口にした瞬間に死刑すらありえるほどの王に対しての不敬罪だ。

それをギリアが許せるわけもなく、ギリアは彼女目掛けて剣を振り下ろした。

「邪魔」

だがアインハルトはそれを虫でも払うかのような傲慢な動作で掃った。

ギインと金属特有の音が部屋に響き、ギインの腕が強制的に持ち上がる。

「私は今メルスと話してるんだ。邪魔者はすっこんでなさい」

轟という音を轟かせながらアインハルトの足がギリアを部屋の壁へと打ち付けた。

「っかは……」

壁に打ち付けられた衝撃に、肺の中にあつた酸素が体外にえと追い出された。

ズルズルと壁から滑り落ちながらギリアは床について沈黙。

「で、メルス。部下の教育はちゃんとしてるのかしら？不敬罪にはするわ剣を向けるわ、……一体どうなってるのかしら？」

ギリアのことなど気にもせず、アインハルトは続けた。ナイトはそんなアインハルトに恐怖してか、それとも他に何か考えてることがあるのか黙っている。

「母様落ち着いて」

だがここで希望の光が射した。先程まで傍観していたアリカがアインハルトを止めに入っただのだ。

「でもアリカちゃん……」

「そもそも時間を守らない母様も悪いから、仕方ないといえば仕方ないよ。まあ時間を守ったとしてもこの恰好じゃどの道城になんて入れるわけないんだし」

「うつ……、わかった。私が悪かったわよアリカちゃん」

フードで顔が隠れているとはいえ、長身のアインハルトが子供だと思われるアリカに言い負かされるその光景はなんと口にしたらいい。

ナイトはそれを見てただ啞然とするだけ。そもそもアインハルトを口でとはいえない負かすなど恐くてできたものではないのだから。

こうもあっさりとアインハルトを言い負かすアリカという少女はいったい何者か。旅に連れを連れていかないアインハルトとともに旅をするとう例外じみたことをしているようで、それだけで“ある程

度”アリカの実力もわかってくる。

「ごめんねーメルスちゃん。結構城壊しちゃったよ？」

「構わぬ……。しかしアインハルト。その者は一体誰じゃ」

パサリとアインハルトのフードが彼女の手によって下ろされる。

そこから現れるは血で染めたような真っ赤な深紅の髪。パサッと両手で靡かせ、彼女。アインハルトは答えた。

「私の娘よ」

六

アインハルトによる爆弾発言にナイトはただ大口を開くだけに終わった。それだけナイトにとっては彼女の発言が信じられなかった。

そもそもアインハルトが子を“産める”のか怪しいぐらいなのだ。それに彼女は昔言っていた。

『私の夫になりたければ、私を倒してみなさい』

その言葉にナイトも、ナイトの父親も彼女を諦めたほどだ。

「説明が足りないよ母様」

「そうね。アリカは義娘よメルスちゃん」

そこでナイトも意識を覚醒させた。言葉としては同じだが、今回アインハルトが言った言葉の意味は違う。それを理解した。

義理の娘。彼女、アインハルトはナイトにそう言ったのだ。

「なるほど……。拾ったのか？」

「まあね。でも後悔してないわ。今では立派な娘よ？」

その言葉の意味通り“立派な”娘なのだろう。ナイトも敵わないくらいなの。

だが嬉しい誤算だ。ナイトにも、この帝国にとっても。嬉しすぎる誤算だ。

もし彼女達親子が協力してくれるのなら、今の帝国の状況もひっくり返せるだろう。

それこそ聖リビア国がした勇者召喚のように。

床に座り込んで沈黙していたギリアを起こし、四人は対面した。

ギリアを起こしたさいにまたいざこざが起きそうにはなったが、何とかナイトがギリアを止めることに成功。

王であるナイトを無下にできないギリアとしては止まるほかなかったのだが。

「私は反対です王」

「しかしのうギリア……」

「断固反対です！」

だがしかし、予定していた交渉も始まる前からギリアによって進まない。

「こんな者達の力など借りずとも王と私さえいれば問題などないはずです！」

ギリアとしては王に暴言を吐いた時点で彼女達と交渉する余地もないと考えていた。普通なら不敬罪で死刑確定だが、ナイトの情けで生きてるようなものだとしかギリアは思っていない。

確かに彼女達はギリアよりかは強い。だがそれでも帝国にはギリアより強い帝国の国王ナイトと、さらに騎士団団長、そして数万の兵がいる。

兵は聖リビア国との戦争でずいぶんと減りはしたが、それでもたった二人の人間に負けるとは思えない。

その気になればすぐにでも殺せるものだとか、ギリアは確信していた。個の力など、数の暴力に及びはしないのだから。

「ふーん。まあ私はどっちでもいいんだけど……メルスちゃんとしてはどうなの？ 私の力を借りたいの？ 借りたくないの？」

「……我として借りたい」

「王！？ なぜですか！」

ナイトの言葉につい声を荒げてしまふギリア。

「我々でも対処は可能です！」

「少し黙ってなさいぼーや」

ギンとアインハルトがギリアを睨み、うつと弱々しい声を出しながらギリアは下がる。

ナイトは悩み、悩み、悩みついた末の決断として彼女を呼んだのだ。元から断る理由などない。

それも

「やっぱりメルスちゃんは賢いわね。知ってるのね……あの情報？」

「……噂で少し聞いた程度だったが……。だがそれでも不安要素と

「いうのは潰しておきたい。そのためのお主じゃ」

帝国の隠密兵が調べた情報の中に噂とはいえ、不安要素があったの事実。

噂は所詮噂と言いたいところだが……たかが噂、されど噂と言ったところだ。完全に信じないわけにもいかない。だが、確定できるほどの情報もない。

ならばもしもの時のための保険を用意するのも当たり前だろう。

それがアインハルトなのだ。

「少し聞いておきたいのじゃが、お主の娘の力量は？」

「まさか私の娘を血まな臭い戦場に連れていけとか言わないよねメルス？」

アインハルトがナイトをちゃん付けで呼ばない時は怒っている時だ。彼女がキレた時はさらに言葉使いも乱暴になるからわかりやすい。

「そうは言っておらん。なに、護衛が欲しかっただけじゃ」

「ふーん。まあアリカは」

「私はそうですね。母様よりかは弱いですが、なんと云えばよいでしょう？まあメルスさんより強いのは確かですね」

喋るアインハルトに被せ、更には少し濁したような答えかたのアリカ。だがナイトは納得したように頷く。

「頼めるかの？」

「母様。もしも本当なら私はここにいたほうがいい。母様が表を倒して、私が裏であるもう一人を倒す」

「いいもなにも、私も友人を失うのは嫌よ？でもアリ力を危険な目にもあわせたくないの。でもこれが一番安全よね。だったら私はそれを選ぶ」

「すまないアインハルト」

謝り、頭を下げるナイト。国王が頭を下げるなどまず見るなどできない。王は絶対だからだ。なにがあっても王だけは絶対でいなければならないのが王である。

だがナイトは必要ならば王のプライドなど捨てれる。

「なーに、気にしないよメルスちゃん」

ナイトに微笑みながらアインハルトはそう言うのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9504s/>

私はこの世界が大嫌いだ

2011年10月8日22時18分発行